114
A 162

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

頃日臺灣生番征討ノ事ニ就テ大臣公ノ下問ヲ辱
フス即今彼地ノ事情ニ於テハ將官諸君ノ既ニ
其巨細ヲ悉クス所ナレハ有朋別ニ縷述スレヲ要セス
有朋大臣公ニ對テ云ク抑モ臺灣生番征討ノ事
ニ至テハ有朋始ヨリ帷幕ノ策ニ與カラサレヲ以テ其
可否ト進勦退軍ノ利害ニ至テハ云フ能ハザレノミ
ナラス若シ現今清國ト干戈ヲ用ユヘキ陸軍諸般
供給ノ準備ニ於テモ有朋ノ敢テ能クスル処ニアラス

唯廟謨ノ決スル処ニアリ

請フ試ミニ前ニ述フル処ヲ詳ニセン有朋平素籌計スル処ヲ以テスレハ実ニ本邦ノ兵制維新以来諸君鞠躬尽力ノ効力ヲ以テ有明就戦ノ日ニ至リ僅カニ耳目ヲ具スルノ地ニ至ルヲ得ルト雖モ未タ目的ヲ達シタルニアラス将校未タ練熟ト云フ可カラス士卒未タ馴練ト云フ可カラス器械未タ備ハレリト云フ可カラス加フルニ内地守禦ノ方策等ニ至テハ一モ未タ手ヲ

下サス有朋自ラ謂フ是猶数年ヲ期シ将官諸君ト共ニ與ニカヲ戮セ日夕労瘁以テ死カラ尽スニ非ラサレハ争カ我カ帝国ノ陸軍ノ基礎ヲ立テ皇威四方ニ震フニ至ランヤ是有朋旧在職中駑鈍ヲ竭シ自ラ止マサル処ナリ然リ而シテ今遽ニ師旅ヲ動カサハ仮令蕞尓弾丸ノ地深ク意トナスニ足ラスト雖トモ若シ事ノ連絡ニ由リ清国ト釁隙ヲ開クニ至テハ其禍蓋シ奉テ言フ可ラサル者アリ故ニ有朋

ニ在テハ前説ヲ村スル耳日来大臣公ニ對フルモ亦
此意ニ過キス
人或ハ云ハン再既ニ陸軍卿タリ陸軍一切ノ事務爾
ノ権内ニ在リ宜ク速ニ可否ヲ決シ若シ進勦ヲ可ト
セハ供給速ニ辦シ皇威ヲシテ愈シ彼ノ地ニ明カナ
ラシムヘシ若シ退軍ヲ可トセハ速カニ上奏シテ一紙ヲ馳
セテ速ニ其軍ヲ招テ帰ラシムヘシト有用云々平戦ノ
権ハ陸軍卿ノ擅ニスル所ニアラス況ンヤ本邦ノ職制

直チニ聖明ヲ輔相スルノ権分アル者ニ非サルヲヤ且
始メヨリ其籌策ニ與カラス遽ニ其可否ヲ言ハヽ遺
策無シト謂フ可ラス畢竟廟堂上深意アルモ有用カ
敢テ知ラサル所ナレハナリ故ニ有用ハ唯前論ヲ持守スル耳
然レトモ誠ニ將官諸君ノ中有用カ駕下ヲ憐ミ教フル処
宜ノ方略ヲ以テセハ獨リ有用ノ幸タル耳ナラス即チ國
家ノ幸又天下ノ幸タレハ有用直チニ敬美服行スルノミ
ナラス素ヨリ有用忝フスル所ノ職ヲ以テ其人ヲ推サレトス

是有用赤心ノ在ル所ナリ
人或ハ謂ハレ尓既ニ陸軍卿列臺湾征討ノ如キハ事既
ニ成リ勢已ニ可ラサ者ナリ 今若シ一旦邉陲事アリ大
釁開クルアラハ尓乃チ手ヲ拱シ前途成筭ナシ吾為ル
ヿ能ハスト言ハンカ
有明云ハク是事ノ類スル者ニ非ルナリ干戈ノ事驚動ノ変
固ヨリ時ヲ期ス可ラス万一禍ヲ未萌ニ察スル能ハスシテ卒
然変動アラハ有用敢テ其任ニ當リ登時ノ宜シキヲ尽シ
師衆ヲ出シ糧器ヲ給ス鞠躬其方畧ヲ尽シ之ニ継ク死
ヲ以テセン耳是事ノ非常ナル者今日前途ノ計ヲナシテ
進ム者ト同日ノ論ニ非ルナリ況ヤ有明今日陸軍卿ノ任ニ
当ル故ニ職守ノ在ル所已カ持論ヲ枉クルコト能ハスト雖モ
若シ聖明ノ撰ヲ蒙リ其ノ将官ノ幕下ニ立チ前驅
後拒ノ事ニ任セシメハ有明駑下ト雖モ亦奮戰死カヲ竭シ進
退唯其命ニ従ハレトス唯今日ニ在リ職守ノ在ル所心ニ誓
テ自ラ欺クコト能ハサルナリ

有朋従来ノ持論如此始終其説ヲ変セスシテ別紙大臣公ヨリ下令アリ陸軍将官ノ會議ヲ徴シ将官諸君各自ノ持論ヲ聊カ有朋カ従来持論ヲ書シテ諸君ノ電覧ニ供シ以テ諸君各自ノ議論ヲ聽アントス是実ニ国家ノ大事将官諸君願クハ各其持説ヲ竭シテ以テ合議スルコトアランヿヲ

明治七年七月八日　山縣有朋

将官諸君

皇政日浅ク兵備未タ完全セス俄然海外一帯國ニ事アラントスルモ其準備ヲ如キ決シテ今日ノ能辯スル所ニ非サルナリ若夫其得失施政ニ関スル者ニ至テハ出ヅ職敢テ知ル所ニアラス謹テ議ス

右陸軍少將津田出

天皇陛下ノ英断ニ出テ我日本全國ヲシテ焦土トナスモ遺憾ナシトセハ固ヨリ論ナシ其

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

番地事務局

戦闘ノ準備ニ至テハ俄然悪頽スヘキ目
的ナシ

右陸軍少将山田顯義

津田山田二氏ノ所見ニ同シ悟機ハ加フルニ
兵器準備ノ任ニアリ現今陸軍ノ兵
器タルヤ全ク年時ノ日進ヲ以テ製造スト
雖モ未タ因変ニスラ應スルニ足ラス況ヤ清
國ト釁ヲ開クニ於テハ各國ハ局外中立
ヲ唱ヘ此時ニ當テハ一小銃一弾亦モ之ヲ他
ニ求ムル能ハス故ニ準備整フト云ヘカラス

右陸軍少将西郷從道

今日清國ト攻撃スルノ備ハ全ク準備ノ日浅
無之

右陸軍少将井田讓

所見井田氏ニ同シ

右陸軍少将谷干城

内閣文庫
蓄地事務局

供給ノ準備完全セスト雖モ戦闘
ニ決スル時ハ今日ハ勿チ今日ノ兵備アリ大
国ト雖モ何ソ顧ミルニ足ラン

出師陸軍少将野津鎮雄
陸軍少将桂太郎